

“出”(“V出”)と“进”(“V进”)の非対称性について —認知意味論の観点から¹⁾—

神野 智久

The Asymmetry of “*chu*” (“*Vchu*”) and “*jin*” (“*Vjin*”): Form The Perspective of Cognitive Semantics

Tomohisa KANNO

内容提要

本文在認知語義学 (Cognitive Semantics) の研究成果上, 对“出”(“V出”)和“进”(“V进”)の非対称現象进行研究。所謂の非対称現象是在対称的基础上成立の非一対一現象。“出”和“进”是在逻辑上対称关系, 但是, 它们在句法和語義上有很多不是一対一的语言現象。譬如, 出(“V出”)可以用于“起点”和“终点”搭配, 而“进”(“V进”)则只能用于“终点”搭配。而且, “出”(“V出”)多用于表示状态变化, 但“进”(“V进”)很少用于表示状态变化。本文认为, 其原因在于認知能力及其身体經驗。

【キーワード】 認知意味論 非対称性 認知能力 身体經驗

0. はじめに

具体的な議論に入る前に、本稿において展開される認知意味論的アプローチにとって重要な点を述べておく。

¹⁾ 本稿は、日本中国語学会2015年度全国大会予稿集に掲載の原稿に、大幅に加筆・修正を加えたものである。言うまでもなく、全ての責任は筆者に帰する。

- (1) a. 言語の意味は、認知能力に動機付け (Motivation) される。
- b. 認知能力 (Cognitive ability) には、しばし²⁾ 身体経験が関与する。(cf. 松本曜 (2003: 9))

まず、(1) a. についてであるが、認知意味論、また認知言語学 (Cognitive linguistic) では、客観主義的な言語観、つまり、言語の意味を認知主体とは独立に存在するという考えと対を成す (cf. 山梨正明 (2010: 4))。そのため、本稿で取り扱う意味の問題もまた、認知能力に動機付けられることを強調する。

次に、(1) b. についてであるが、認知言語学には、経験に基づいて言語の意味づけを行っているという考えがある。例えば、量の増減という非空間的な事態を、空間表現を用いて表現することがある。これは、MORE IS UP ; LESS IS DOWN (量が多いことは上、少ないことは下) という概念メタファー (Conceptual metaphor) として、体系を成している。

(2) a. My income rose last year. (昨年の収入が上がった。)

b. His income fell last year. (昨年の彼の収入は落ち込んだ。)

(谷口一美 (2013: 21))

“rise” や “fell” は、本来空間移動を表す動詞であるが、我々は、普段から本来空間とは関係のない経験を、「上下」という位置関係で捉えている (cf. 谷口一美 (2013: 21))。このように、言語には我々の経験が関与しているのも、また事実である。

以上の2点から、本稿では、“出” (“V出”) と “進” (“V進”) の非対称性 (Asymmetry)³⁾ は、身体経験 (Body experience) に基づいた認知能力 (Cognitive ability) に動機づけられることを、以下の段階に沿って証明する。

I. 第1節で、“出” (“V出”) と “進” (“V進”) には、非対称性が認め

²⁾ 『純粋理性批判』では、「認識」は、純粋な認識 (経験から独立した認識) と経験的な認識に分けられている。そういった意味で、ここでは「しばし」と表現されると考えられる (cf. カント (2010))

³⁾ 本稿では、非対称性の定義を「対称的な基盤を有しながら、その実は対称でない現象」とする。例えば、右目と左目は共に同じ構造を有しているが、視力において非対称である。

られることを、言語事実から指摘する。

- II. 第2節で、第1節で指摘した非対称性は、容器の内と外への際立ち(Salience)の高さと、それに基づく認知能力に起因することを指摘する。
- III. 第3節で、容器の内と外への際立ちの異なりは、容器のスキーマ(Container schema)が形成される身体経験に基づいていることを指摘する。

1. “出”(“V出”)の意味について—“進”(“V進”)との比較も併せて

“出”(“V出”)は、図1のイメージスキーマに基づき、物理的な移動をプロトタイプ的な意味とする。起点からの移動は、自己移動(図1-a)と使役移動(図1-b)⁴⁾に分けられる⁵⁾。

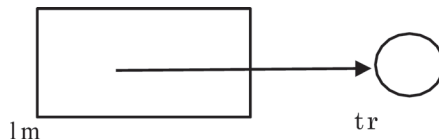


図1-a 起点からの移動(自己移動)

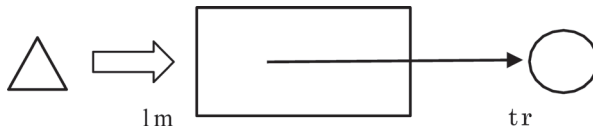


図1-b 起点からの移動(使役移動)

図中のlm(ランドマーク)とは、容器のスキーマを指す。lmとtr(トラジェクター)は、際立ちにおいて違いが見られる。際立ちの最も大きい部分

⁴⁾ここでの「使役(Causation)」とは、語彙的使役(Lexical causatives)のことを指す。さらに本稿では、もの(Object)を対象とした配置事象(Placement events)(Chen.2012:37)に、研究対象を限定する。

⁵⁾自己移動とは、物体に働きかける力が顕在的に存在しないにも関わらず、物体が動き出す事象を意味する。幼年期から、子供はひとりでに動きだす物体と、押される等、力を加えられることによって動かされる物体との区別に敏感であることが報告されている。(cf. 児玉・野沢2001:34)

構造を tr と呼び、それ以外の際立ちの大きい部分構造を lm と呼ぶ⁶⁾(辻幸夫編(2013:255))。そして、容器は、内部、外部、境界から成り立っており(児玉・野沢(2013:32))、図 .1-b の左方にある矢印は外的な力を指す。

【自己移動】

- (3) a. 我看着漂亮的图案喝了不少红酒，又吃了浇了巧克力汁的冰淇淋，下午走出餐厅。 (王朔《一半是火焰一半是海水》)

(綺麗なデザインを見ながらワインを飲み、更にチョコレートがかけられたアイスクリームを食べ、午後レストランを出た。)⁷⁾

- b. 从机场出来，我们还在武林门赁了辆三轮车，冒雨在西湖玩了一圈。 (王朔《空中小姐》)

(空港を出てから、我々は武林門で三輪車を借り、雨の中西湖をグルッと一周して遊んだ。)

- (4) a. 他从小包里取出一副眼镜戴上。

(《对外汉语教学实用语法》以下《对外》p.195)

(彼は、小さなバッグからメガネをとりだしてかけた。)

- b. 这些书不能带出图书馆去。 (《对外》p.195)

(これらの本は、図書館から持ち出してはいけません。)

2.1 組み合わさる場所目的語

刘月华主编(1998:10)では、“出’组的处所宾语多表示动作的起点，但如果处所宾语为‘门外’，‘门外’表示位移的终点。(‘出’と組み合わさる場所目的語の多くは、起点を表すが、その場所目的語が‘门外’の場合、移動後の着点を表す)”と指摘されている。刘の指摘により、ある程度制約がつくが、“出”(“V出”)は起 点と着点を場所目的語にとる二義性があることがわかる。

⁶⁾ 山梨正明(2000:78)では、図と地の認知区分についてとりあげ、そのうち、移動する存在を表現する場合は図、その背景になる部分は地であるとしている。むしろ、図一地、tr—lmにはその定義について差が見られるが、本稿では同一に取り扱う。両者の異同については、松本曜(2003:50)を参照にされたい。

⁷⁾ 本稿における実例の訳文は、全て筆者によるものである。ただし、訳文のあとに出典がある場合は、その限りではない

【**起点**との組み合わせ】

- (5) a. 王眉！我看到密密人名中这两个字，清晰、无误。阿眉殉职了！泪水涌出我的**眼睛**。（王朔《空中小姐》）
（王眉：私は、びっしりと並んだ人名の中にこの二文字を見つけた。はっきりとしていて、間違いではない。阿眉が殉職した！涙が私の目から溢れ出た。）
- b. 我看着她，又扫了眼周围正注视着我的人，摇摇头，端着饭菜**走出了食堂**。（王朔《永失我爱》）
（私は彼女を見ながら、また周りで私のことをじっと見ている人々にも目を配り、頭をふり、料理を持って食堂を出た。）

【**着点**との組み合わせ】

- (6) a. 橡皮球**跳出了围墙外**。（ゴムボールが跳ねてフェンスの外に出て行ってしまいました）（『通訳メソッドを応用したシャドウイングで学ぶ中国語基本動詞93』p.150以下『通訳』）
- b. 他一脚把球**踢出****门外**（刘月华主编（1998：10））
（彼はひと蹴りでボールを門の外に蹴り出した。）
- また、“出”（“V出”）の二義性は、存現文にも見られる。

【**着点**的解釈】

- (7) a. **她脸上**露出了笑容（刘月华主编1998：24）
（彼女の**笑顔に**笑えがこぼれた）
- b. 暖的呼吸**在冷的玻璃上**喷出淡白的花（张爱玲《炎凉世态》）
（暖かな呼吸は**冷たいガラスに**、淡白な花が咲いた）

【**起点**的解釈】

- (8) a. 他在墙外走过，**墙头树头**跳出一只球来（张爱玲《连环套》）
（彼が壁の外を歩いていると、**壁から顔を出した木のてっぺんから**、ボールが飛び出した。）
- b. 林震列席参加。他坐在一角，心跳、紧张、**手心里**出了汗。
（王蒙《组织部来了个年轻人》）
（林震も出席した。彼はすみっこに腰を下ろすと、心は高鳴り、緊張し、**手のひらから**汗が出た。）

例(7)(8)における場所は、共に出現する場所である⁸⁾が、(7)は、日本語の二格と共起するので着点的、(8)は、カラ格と共起するので起点的であると解釈できる。

反対に、“進”(“V進”)は着点としか組合わさらない。

【起点】との組み合わせ】

(9)“進”(“V進”)と組み合わせる場所目的語、例えば、“张三跑进食堂来了”(張三は食堂に駆け出して来た)の“食堂”を起点と解釈することはできない。そのため、“张三从食堂跑出来了”、“张三跑出食堂来了”。のように、“出”や“从”の使用を必要とする。

【着点】との組み合わせ】

(10) a. 他进礼堂来了。(彼は講堂に入ってきた。)

(『ゼロから始める中国語』 p.112)

b. 他怀着激动的心情走进故宫博物院。(《对外》 p.195) (彼は興奮した気持ちで故宮博物館に入った。)

非対称性①：“進”(“V進”)と共起できる場所目的語は、着点のみである。

2.2 状態変化義

“出”(“V出”)の状態変化義を述べる前に、認知意味論における「状態変化」の捉え方について、以下の2点を強調しておく。

(11) a. 状態変化 (Change of state) は、主観的变化 (Subjective Change) と客体的变化 (Objective change) に分けられる。

b. 状態変化は、具体的空間が抽象的空間へと拡張することによって産出される。

⁸⁾ “出”(“V出”)が出現を表せる動機付けとして、起点の背景化 (Background) という認知能力が挙げられる。例えば、「星が出てきた」や「霧が出てきた」では、星や霧がどこから出てきたのか、その起点を問うのは困難である (cf. 山梨正明 (2000 : 79-80))。これは、起点が背景化されたことにより、場所を特定するのが困難なためであることが考えられる。そして、起点 (容器の内) が背景化することによって、起点の外 (より厳密にいうなら容器の外) がプロファイルされ、「出現」という意味がなりたつ。プロファイルシフトについては、本稿の第2節を参照にされたい。

まず、(11) a. の主張の根拠として、事態の解釈モード（cf. 河上誓作（1996：6））が挙げられる。河上は、事態への解釈は、解釈する事態を自分とは完全に切り離されたものとして客体化するやり方と、意識する、しないに関わらず、自分がその事態に関わった形で主体的に解釈するやりかたがある、と述べている。このことを、日本語の例で見てみよう。

(12) a. 駅伝の選手が軽快な足取りで山道をくだっている。

b. この山道は展望台のあたりから急激にくだっている。

（靱山洋介 2010：54）

(12) a. が「人間が実際に移動している」場面を描写しているのに対して、(12) b. は、人間が実際に移動していることを表すのではなく、主体的に視線を移動させた（＝走らせた）結果である（cf. 靱山洋介 2014：54）。つまり、主体的に「変化した」と把握する主観的变化もまた、状態変化の1つであるといえるだろう。

次に、(11) b. についてであるが、状態変化義は、例3～6における物理的な空間としての容器が、社会的、心理的な空間へと拡張することによって生み出されるメタファーである。このことを、日本語の例で見てみる。

(13) a. 彼は寝室に入った。（物理的空間）

b. 彼は新しいクラブに入った。（社会的空間）

c. 彼は躁状態に入った。（心理的空間）（山梨正明 2009：92）

(13) a. の「寝室」は、物理的空間に基づく容器として理解される。これに対し、(13) b. の「新しいクラブ」は、社会的な空間に基づく容器に、また、(13) c. の「躁状態」は、心理的な空間に基づく容器のイメージスキーマに比喩的に拡張されている（cf. 山梨正明（2009：92））。

上記に挙げた山梨の分類に基づき、“出”（“V 出”）で表される状態変化を「社会的な空間」と「心理的な空間」に分ける。

【社会的空間】

(14) 一个人出名到某一个程度，就有权利胡说八道。（张爱玲《诗与胡说》）

（ある程度有名になれば、とんでもないことを言う権利を持つ。）

(15) 这是新出的纪念邮票。（《汉语会话 301 句》p.83）

（これは新しく出た記念切手です。）

(16)他从邻居那里买出两间房子。 (刘月华主编 (1998 : 219))

(彼は隣りから二部屋買った。)

(17)我到北影道具库看了, 美式军装都被上戏的剧组借出去了, 只有国民党的军服。 (王朔《你不是一个俗人》)

(北影の倉庫に行って見たところ、アメリカ軍の軍服は上海戯劇学院のクルーに借りられてしまって、国民党の衣服だけがあった。)

(14)は、名が世間の人々に知られる人となるという変化を、(15)は、世に出るという変化を、(16)(17)は所有物の変化を表している。

【心理的空間】

(18)雨住了, 太阳出来了。

(雨がやんで、日がさしてきました) (『通訳』 p.160)

(19)冰冻化开了, 冒出腾腾白气。 (刘月华主编 (1998 : 217))

(氷がとけ、白い煙がもうもうと出ている。)

(20)他一说话我就听出他不是中国人。

(《外国留学生学习汉语疑难例解》 p.71)

(ちょっと話をしただけで、彼が中国人ではないとわかった。)

(21)那一次的照片洗出来了吗? 。

(あの時の写真は現像できましたか?) (『通訳』 p.40)

例(18)(19)では、視界へと現われ見えるようになるという変化が⁹⁾、(20)では外的な力によって認識へと現われる変化が、(21)では「出来上がった状態にする」という変化が表されている。反対に、“进”（“V进”）の状態変化義は、刘月华主编 (1998) では、以下に挙げられるのみである。

(22)桌子凹进一块, 很不美观。 (刘月华主编 (1998 : 217))

(机に凹んでいる部分があり、見てくれが悪い。)

(23)他额头瘪进一块, 很显眼。 (刘月华主编 (1998 : 217))

(彼の額には凹んでいるところがあり、とても目立つ。)

→非対称性②：“进”（“V进”）は派生義に乏しい。

⁹⁾ 視界も容器に見立てられる (cf. Lakoff and Johnson. 1980 : 26 / 邦訳 1986 : 46)。

2. 上記拡張義への動機付け

非対称性①、②は、共に際立ちの高さの非対称性に起因することが考えられる。際立ちの高さとは、注意や関心の度合いのことを指す。

【際立ちの高さの非対称性】

(24) a. “出” (“V出”) で表される「起点からの移動」は、容器の外と内への際立ちの高さが等しい¹⁰⁾。

b. “進” (“V進”) で表される「着点への移動」は、容器の内への際立ちの高さは、外よりも相対的に高い。

(24)の妥当性の証明は、第3節に回し、本節では、容器の外と内への際立ちの高さが等しい“出” (“V出”) は、「プロファイルシフト (Profile shift)」、 「類似性の把握」との動機付けを可能とし、それにより拡張義が成り立つことを述べる。

2.1 「プロファイルシフト (Profile shift)」との動機付け

例(5)(6)は、プロファイルシフト (焦点化) という認知能力、つまり、焦点化する範囲を容器の内か、外かによって意味が拡張された用法である。例えば、英語の不定詞 out は、以下のようにプロファイルする範囲を変化させることによって、意味の拡張を可能にしている。

【外に出る】

(25) a. He went out (彼は出て行った。)

b. The light went out. (電気が消えた。)

【中に入る】

(26) a. He came out. (彼は出てきた。)

b. The stars came out. (星が現れた。)

(以上、宗宮他 (2007: 92))

(25)は、プロファイルする範囲を容器の内に置いた例、(26)は、プロファイル

¹⁰⁾「際立ち高さが等しい」という主張は、コーパスからも裏付けられる。日本語の動詞「出る」に共起する「起点」の格 (ヲ、カラ) と「着点」の格 (ニ、ヘ) の数は、ほぼ同等であるとの報告がある (cf. 宮島達夫 (1996))。宮島のデータは日本語を対象としたものだが、中国語でも同様の結果が出るのが期待される。今後の課題としたい。

する範囲を容器の外に置くことにより成り立つ例である。つまり、前者はtrが視野から出て行き、後者は視野に入ることを表す。(cf. 靱山・深田(2003: 153))

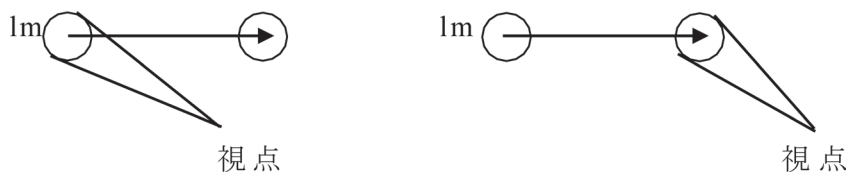


図2 プロファイルシフトのイメージスキーマ

(靱山・深田(2003: 153)を基に作成)

同様に、日本語の「出る」にもまた、プロファイルシフトによる意味拡張が見られる。

- (27) a. 東京行きの電車は3番ホームから出ます。
- b. 民間人から多くの犠牲者から出ます。
- c. 疲れが目尻に出ている。
- d. 知り合いがテレビのクイズ番組に出た。

(伊東健人(2013: 111))

伊藤は、「起点」がプロファイルされている(27) a. は「出発」、(27) b. は「発生」に、「着点」がプロファイルされている(27) c. は「出現」、(27) d. は「出演」を表していると、述べている¹¹⁾。

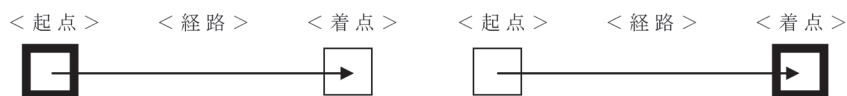


図3 〈起図〉から〈着点〉へのプロファイルシフト

(伊東健人(2013: 111)を基に作成)

“出”（“V出”）とは反対に、容器の内と外への際立ちが等しくない「着

¹¹⁾ さらに伊藤は、これらの拡張義を構文（Construction）レベルでの拡張であると述べている。

点への移動」は、プロファイルシフトが成り立ちにくい¹²⁾。

2.2 類似性の把握—メタファーとの動機付け—

メタファーとは、2つの事物・概念の何らかの「類似性（Similarity）」に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表す比喩である（榎山洋介（2010：35）¹²⁾）。この定義から考えると、“出”（V出）という空間移動を表す動詞（複合動詞）で状態変化を表すことができるのは、両者に類似性が認められるからである。谷口一美（2003：73）では、移動とは、ある「場所」から別の「場所」へと位置が変化することである。したがって、ある「状態」から別の「状態」への変化も「移動」である、という理解が自然に導かれる、とある。谷口の考えを、本稿に照らしあわせると以下のようになる。

(28) “出”（V出）で表す「起点からの移動」は、「容器の内」から「容器の外」への移動という、2つの局面を捉え、状態変化もまた「既存の状態」から「新しい状態」への移行という2つの局面を捉える。

この動機付けにより、“出”（V出）を用いて状態変化を表すことを可能としている。反対に、容器の内と外への際立ちが等しくない「着点への移動」は、メタファーが成り立ちにくい¹³⁾。

3. 身体経験からの実証

本節では、(24)の主張は、容器のスキーマ（図1におけるlm）が形成される身体経験に基づいていることを証明する。Mandlerは、乳幼児は以下のような包含関係に関わる多くの経験を経て容器のスキーマが形成されると指摘する（cf. Mandler. 1992：597、児玉・野沢（2000：32））。

¹²⁾ この類似性を把握する能力は、ヒトの基本的な認知能力である「比較（Comparison）」に含まれるものである（cf. Langacker（1987：103-105）；Croft & Cruse（2004：54-55））。比較とは、「2つ（以上）の対象について、ある観点から観察・分析することによって、共通点・相違点を明らかにする」ことである（cf. 榎山洋介（2010：1））

¹³⁾ “進”（V進）にもメタファー的用法は存在する。例1）我们厂又进了一批新工人（《现代汉语八百词 增订版》）。この例における場所は、社会的な空間である。

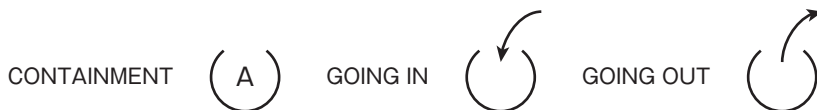


図4 「包含」「中に入る」「外に出る」のイメージスキーマ

(Mandler (1992 : 597))

Case1. ミルクの移動

- 容器：ミルクが入った容器
- 着点への移動：ミルクを容器に入れる
- 起点からの移動：容器からミルクを出す

Case2. 衣服の着脱

- 容器：自分の体
- 着点への移動：服を着る
- 起点からの移動：服を脱ぐ

Case3. 飲食

- 容器：自身の体
- 着点への移動：食べ物を食べる
- 起点からの移動：食べ物を吐き出す

Case4. 有界移動

- 容器：教室
- 着点への移動：教室に入る
- 起点からの移動：教室から出る

そして容器のスキーマを形成する身体経験には以下の事実が含まれる。

(29)「起点からの移動」は「着点への移動」を前提とするが、逆はその限りではない。

(29)の主張を、まず有界移動の例 (Case4) を用いて検証してみる。

(30) a. 教室から出るには、先に教室に入らなければならない。

b. 教室に入るには、？ 必ず教室から出なければならない。

(30) a. は、「起点からの移動」は「着点への移動」を前提とすることを表している。つまり、「起点からの移動」は、「着点への移動」を前提としている

からこそ、起点である容器内と移動先の容器外は、同等の際立ちの高さを持つといえるのである。反対に、(30) b. からは「着点への移動」は、「起点からの移動」を必須としないことが読み取れる。そのため、容器の外への際立ちが低いのである。(29)の主張は、以下に挙げた全てのCaseに当てはまる。

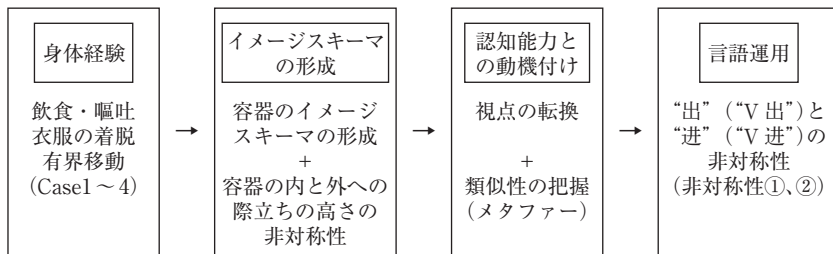
- (31) a. ミルクを容器から出すためには、先にミルクを容器に入れなければならない。
- b. ?ミルクを容器に入れるためには、先にミルクを容器から出さなければならない
- (32) a. 服を脱ぐためには、先に服を着なければならない
- b. ?服を着るためには、先に服を脱がなければならない。
- (33) a. (饅頭を)嘔吐するためには、先に(饅頭を)食べなければならない。
- b. ?(饅頭を)食べるためには、先に(饅頭を)嘔吐しなければならない。

以上の検証から、(24)の際立ちの高さの非対称性については、「起点からの移動」は「着点への移動」を前提とするが、逆はその限りではないという身体経験に基づいていることがわかる。つまり、「着点への移動」を前提とする「起点からの移動」は、起点が選択されるが、「着点への移動」は「起点からの移動」を前提としないため、起点が選択されない。選択されたものは、選択されないものより、相対的に際立っているといえる (cf. Langacker (2008 : 66) / 邦訳 (2011 : 86))。

4. おわりに

本稿の検証を通して、“出”(“V出”)と“進”(“V進”)の非対称性は、容器のイメージスキーマが形成される身体経験から理解される事実(つまり、「起点からの移動」は「着点への移動」を前提とするが、逆はその限りではない)に基づくことが証明できたといえる。

そして本稿では、言語運用(Performance)から身体経験へと遡る形で、検証を行ったが、最後に、身体経験から言語運用までの流れを以下に示し、本稿のまとめとしたい。



【参考文献】

日文

- 伊東健人（2013）「イメージスキーマ」『認知言語学 基礎から最前線へ』くろしお出版
- カント（中山元 訳）（2010）『純粹理性批判 1』光文社文庫
- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社
- 児玉一宏・野沢元（2000）『講座 認知言語学のフロンティア⑥』言語習得と用法基盤モデル－認知言語習得論のアプローチ』研究社
- 松本曜（2003）「認知意味論とは何か」『シリーズ認知言語学入門〈第3巻〉認知意味論』大修館書店
- 宮島達夫（1996）「格支配の量的側面」『論集 日本語研究（一）現代編』明治書院
- 榎山洋介・深田智（2003）「多義性」『シリーズ認知言語学入門〈第3巻〉認知意味論』大修館書店
- 榎山洋介（2010）『認知言語学入門』研究社
- 宗宮喜代子・石井康毅・鈴木梓・大谷直輝（2007）『道を歩けば前置詞がわかる』くろしお出版
- 谷口一美（2003）『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社
- 辻幸夫（編）（2013）『新編 認知言語学キーワード辞典』研究社
- 山梨正明（2000）『認知言語学原理』くろしお出版
- 山梨正明（2009）『認知構文論－文法のゲシュタルト性』大修館書店

中文

- 刘月华主编（1998）《趋向补语通释》北京语言文化大学出版社

英文

- Chen, J. 2012. “She from bookshelf take-descend-come the box”: Encoding and categorizing placement events in Mandarin. *Events of putting and taking: A crosslinguistic perspective*. Amsterdam: Benjamins.

Cruse, A. & Croft. W. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge

Lakoff, M. and M. Johnson. 1980 *Metaphors We Live By*. Univ. of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店)

Langacker, R. W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford Univ. Press. (山梨 正明監訳 (2011) 『認知文法論序説』研究社)

Mandler, Jean. M. 1992. "How to build a baby II : Conceptual Primitives." *Psychological Review* 99